

## 古くて新しいアテネの道

北海道工業大学社会基盤工学科教授

間山正一

MAYAMA Masakazu



■写真1ーオリンピック・スタジアムの一部。開幕まで2ヶ月の頃

## 宴の前

“宴の後”という表現は、人口に膾炙<sup>かいしや</sup>しているが、今日の話は、勝手な造語である“宴の前”の話である。

2004年8月13日から17日間にわたって熱闘をくりひろげた第28回オリンピック競技大会をご記憶でしょうか？108年ぶりにギリシャにオリンピックが帰ってきた大会である。

当然とはいえ、オリンピック競技の華やかな宴ばかりが目ざされたわけだが、今日の本題は、オリンピックに関わるインフラストラクチャともいべき競技施設の話である。僭越<sup>せんえつ</sup>を承知の上で言うのであるが、縁の下<sup>えんの下</sup>の力持ちである土木技術者の誇りを復活させたいのである。

競技はもとより各種のセレモニーの場として重厚にして華麗な演出の舞台を提供するオリンピック・スタジアム(メイン・スタジアム)は、オリンピックのもう1つの華である。技術者達は、土木・建築の技術の粋を尽くして“構造物”を建設し、これから展開される激闘の“舞台”を提供できることを密かに誇るのである。



■写真2ー工事中のオリンピック・スタジアム全景

## 工事中

“宴の前”の、色気は無いが技術者にとっては胸が躍る貴重な数枚をお目につけよう。写真1は建設中のオリンピック・スタジアムの一部で、簡便なデジタル・カメラで撮った数枚をつなげた写真である。不謹慎な言



■写真3ー復元中のアテナで発見されたトリポドス通り

い方になるかもしれないが、これだけで立派な芸術品に見えるのは技術屋魂が高ぶっているせいでしょうか。それとも機能的で美しい形状が、世界に誇るギリシャの青空を借景としているせいでしょうか。

「こうなれば、全景を見たい」。お見せしましょう。プロの読者諸氏の前ですから詳しい説明は割愛させていただきますが、あの荘厳で華やかなオリンピック・スタジアムが想像できますね。問題は「写真に写った工事現場の様子から見て、開幕の1年以上前の写真か？」「9.11テロ後の対テロ警戒態勢の中でこの角度から写した写真をどういうルートで入手したか？」である。

答えは二ヶ月前です。「議論ばかりしていて、大丈夫だろうか」「あと二ヶ月でスタジアムができるわけがない」。「…」。大丈夫、ここは哲学の国・ギリシャです。この国に何度も来ると分ります。オリンピックの開会ぎりぎりまで哲学的議論をし、結局は諸施設やインフラを期日に間に合わせてしまうのです。そしてもう1つの答えが、対テロ警戒態勢にもかかわらず、土木工学の研究者の恩恵で、建設中のスタジアムやアクセス用の橋の上に立たせていただき、職人の鮮やかな手さばきをとくと拝見しました。グreek・ホスピタリティ(Greek Hospitality)に感謝。

## オリーブ

日本には「敵に塩をおくる」という一種の美学があるが、アテネではちょっと事情が違うようだ。ギリシャの首都の守護神の座をめぐって、市民に贈り物攻勢をした2人の神に登場願おう。女神アテナはオリーブの木を、海の神ポセイドンは塩水の泉を贈ったが、選ばれたのはオリーブ。勝負に勝った守護神アテナの名にちなんで、この町はアテネと呼ばれるようになった。

オリーブは、ギリシャの国花であり、平和の象徴である。食用、美容、石鹸、香料、照明、家具等に使用さ



■写真4ーデルフィからアテネに向かう高速道路

れ、ここではオリーブ無しの生活は考えられないわけである。またギリシャ正教の洗礼では、オリーブオイルが使用される等、宗教的な一面も持つ。

近代オリンピックのメダリストには、今まで月桂樹の冠が与えられてきたが、アテネオリンピックでは、オリーブの冠が復活したのも当然であろう。

## ヘリテージ

遺跡(ヘリテージ)の町・アテネでは、遺跡の発見はまだまだ進行形である。道路の技術者にとっての必見は、新しく発見され復元中のトリポドス通りである。

ゼウスが東西に放った二羽の鷹が、デルフィで再び出会った。それ故に、古代ギリシャにおいて世界の中心とされた「大地のへそ」デルフィは、観光客がひきまきらない。そのせいであろうか、デルフィからアテネに向かう高速道路もアテネに近づくにつれて渋滞がひどくなる。間に合うのだろうか。大丈夫です。“宴の後”では結果が分かっているが…。